

東京大学医学教育 国際協力研究センター



東京大学医学教育
国際協力研究センター
〒113-0033
東京都文京区本郷7-3-1
医学部総合中央館212
TEL 03-5841-3583
FAX 03-5802-1845
E-mail:ircme@m.u-tokyo.ac.jp
http://www.ircme.u-tokyo.ac.jp

No. 6

International Research Center
for Medical Education

表題：海野濤山書



センター前のあじさい

CONTENTS

- ◆ 第2回医学教育国際協力研究フォーラム「大学における医学教育国際協力活動の推進」開催報告
.....センター講師(医学教育国際協力事業企画調整・情報部門) 水嶋 春朔 ...2
- ◆ アフガニスタンの医学教育支援事業センター講師(医学教育国際協力事業企画調整・情報部門) 水嶋 春朔 ...3
- ◆ 医学教育国際協力に関する“オンライン人材情報データベース”始動
.....センター講師(医学教育国際協力事業企画調整・情報部門) 水嶋 春朔 ...3
- ◆ ワークショップ「地域におけるプライマリ・ケア卒後・生涯教育プログラム」報告センター客員研究員 松村 真司 ...3
- ◆ Faculty Development の報告と計画センター助教授(医学教育国際協力研究部門) 大滝 純司 ...4
- ◆ 北里柴三郎先生 生誕150周年記念シンポジウム -教育者・研究者として-センター長 加我 君孝 ...6
- ◆ ノエル先生医学教育連続講義の出版計画についてセンター講師(医学教育国際協力事業企画調整・情報部門) 水嶋 春朔 ...7
- ◆ 赤津晴子先生講演会センター事務補佐員 田口 淑子 ...7
- ◆ 自己紹介センター研究機関研究員 若林 正 ...7
- ◆ センター日誌／編集後記8

第2回医学教育国際協力研究フォーラム 「大学における医学教育国際協力活動の推進」開催報告

センター講師

(医学教育国際協力事業企画調整・情報部門)
水嶋 春朔

2003年2月21日(金)に、第2回医学教育国際協力研究フォーラム(テーマ:「大学における医学教育国際協力活動の推進」)を開催し、60数名の熱心な参加者があった。

文部科学大臣が招集した国際教育協力懇談会が2002年7月に最終報告書を公表し、高等教育に関しては、「大学の知的資源を活用した国際開発協力の促進」を提言した。医学教育分野(医・歯・薬・看護・保健・栄養など)における国際教育協力を推進し、「顔の見える」「心の見える」貢献をすすめるためには、大学による国際協力を推進するためのセンターの整備、ネットワーク化、人材データベース構築などが重要となる。

このフォーラムは、わが国の大学における国際教育協力の促進に必要な体制や活動のあり方について、議論を深めるとともに、当センターの果たすべき役割について方向性を明らかにすることを目的として、開催された。

基調講演(座長:北村 聖教授)では、国際教育協力懇談会協力者で当センター設立にあたって当時医学部長としてご尽力をいただいた矢崎義雄先生(国立国際医療センター・総長)に「わが国の国際医学教育協力のありかた」、ならびに文部科学省大臣官房国際課国際協力政策室の行松泰弘室長に「国際教育協力推進のための大学の役割」をご講演いただき、国際教育協力懇談会の報告書の内容や文部科学省の方針などについて紹介していただいた。

文部科学省では、我が国の大学と国際援助機関との間、あるいはコンサルタント企業・国内外の大学などの連携機関との間の結節点となり、両者の関係強化を図るための、「サポート・センター」を設立することとしており、既に国立大学に設置されている分野別のセンターとの密接な連携を図りながら、援助機関及び連携機関の関係構築や国内大学の国際開発協力のための基盤醸成及び実務能力向上などを支援していくこととしている。

またシンポジウム「大学における医学教育国際協力活動の推進～医学教育国際協力研究センターの役割～」(座長:水嶋春朔講師)では、国際協力にご造詣が

○文部科学省「サポート・センター」における活動内容

1. 大学における国際開発協力活動の基盤の醸成
国際開発協力活動の理解増進のため、国際援助機関関係者による大学での講演会、個々の大学の国際開発協力に関する相談・助言の実施、等。
2. 大学組織と国際援助機関との関係構築
大学組織、大学教員に関するデータベースを整備し、専門家を紹介、斡旋、等。
3. 国内大学間、大学とコンサルタント企業・海外の大学間の連携の促進
コンソーシアムを形成する際の契約条件等、連携に関する課題の研究、助言の実施、等。
4. 大学における実務能力の向上
大学教員及び事務局職員を対象に、プロジェクト実施に関する基礎知識、各種の調査手法、英語によるプレゼンテーション、企画提案書作成、英文契約書作成事務などに関する研修を実施。

深い5名の先生方に、それぞれのお立場から、わが国の新しい医学教育国際協力の展開についてご発表いただいた。

・若井 晋

(東京大学大学院医学系研究科国際地域保健学・教授)
「国際保健医療における国際協力の現状と課題」

・岡崎 勲

(東海大学大学院医学研究科国際医療保健協力センター・センター長)
「21世紀保健指導者養成コースと東海大学国際医療保健協力センターの役割」

・江藤 一洋

(東京医科歯科大学・副学長・歯学部長)
「東南アジア歯学教育情報技術センター構想」

・村岡 亮

(国立国際医療センター運営部・政策医療推進調整官/国際医療協力局(併))

「国立国際医療センターにおける国際医療協力と大学との連携」

・國井 修

(外務省経済協力局調査企画課・課長補佐)
「日本の国際医療協力と大学への期待」

総合討論では、今後、大学がどのように医学教育に関する国際協力に貢献出来るのか、どのように人材育成をしていったらいいのかに関して討論された。

ODA(政府開発援助)を直接進める現場で、有用な人材養成をしていくには、人づくりをしている大学などのコース、研修においても、教育したことや研修したことが、国際協力の場でどう使えるのか、使えるものにするのか、または、修士課程などを修了した人がどれだけ活躍できる場を得られるかといったことを考えて、ビジョンをもってすすめることが重要だ、といった議論が展開された。標準化と多様化、高度化、特色を持ったコースも必要だとのコメントなどもあった。

国の方針を踏まえた国際協力のミッションの中で、有用な人材を育成していくことに貢献していくためには、大学は、人材の「倉庫」ではなく「宝庫」に成るべきである、と感じられた。



第2回医学教育国際協力研究フォーラムシンポジスト

アフガニスタンの医学教育支援事業

センター講師

(医学教育国際協力事業企画調整・情報部門)
水嶋 春朔

日本はアフガニスタン復興支援国際会議(平成14年1月)において、向こう2年6ヶ月で最大5億ドルまで、そのうち最初の一年間で最大2億5千万ドルまでの復旧・復興支援を行うことを表明した。無償資金協力案件を含め、現在までのところ、日本は総額約3億8,000万ドルの復興支援を行っており、人道支援を含めると、米国同時多発テロ以降に実施した対アフガニスタン支援総額は約4億7,200万ドルとなる。

文部科学省においても、教育、文化財及び地雷探知・除去の分野でアフガニスタンの復興を支援している。大学等による女子教員研修、研究者・留学生の受け入れなどがおこなわれている。これまでに進められている支援は、五女子大学コン

ソーシアム(お茶の水女子大学、奈良女子大学、日本女子大学、東京女子大学、津田塾大学)による女子教育支援、農業工業大学による農学・獣医学・工学教育支援、京都大学による薬学教育支援などがある。

当センターは、アフガニスタンにおける医学教育の支援の中心的役割を果たすことに関して打診を受けて、協力をしていく準備を開始した。

平成15年4月10日(木)には、アフガニスタン医学教育支援に関する会議が、国際協力事業団で開催され、同医療協力部、文科省国際協力政策室(行松室長、勝平海外協力官)、センター教官(北村、大滝、水嶋)の3者会合がもたれた。アフガニスタン復興支援の方針、状況などについて詳細な情報提供があり、今後、具体的な協力の方法について検討していくことになった。

○日本のアフガニスタン医療保健協力重点分野

- (1) 効率的な保健サービスが提供できるよう政府のマネージメント能力を強化
- (2) 女性の健康(周産期医療)を推進
- (3) 子供を予防可能な疾病から守る
- (4) 感染症対策(特に結核対策)

平成15年4月28日(月)には、アフガニスタン復興支援事業報告会(文部科学省別館9階特別会議室)が開催された。文科省関係のアフガニスタン復興支援は、大学等による女子教員研修、研究者・留学生の受け入れなどがおこなわれている。関係大学が有する協力経験や情報を共有し意見を交換する場として開催された。

医学教育国際協力に関する“オンライン人材情報データベース”始動

センター講師

(医学教育国際協力事業企画調整・情報部門)
水嶋 春朔

医学分野(医・歯・薬・看護・保健・栄養等)におけるわが国の国際教育協力に貢献可能な人材情報に関するアンケートを、2001年12月に実施しました。各国公立大学 医学部医学科および看護学科、歯学部、薬学部、看護学部・保健学部など、家政学部栄養学科など計540学科各学部学科長宛に送付し、174学科に所属する教員など計2220名の方のご協力

を頂戴いたしました。ご理解、ご協力に深く御礼申し上げます。

このアンケートは、各大学医学分野の教官・研究者等を対象に、国際貢献の経験や計画などについての情報を整理しデータベース化し、ODA(政府開発援助)などの我が国の教育協力の推進に協力可能な人材を把握することを目的としています。個人情報の保護には万全を期し、センター担当者以外が取扱うことはなく、部外者への開示、公開などは一切しておりません。

現在、大学病院医療情報ネットワーク

(UMIN、<http://www.umin.ac.jp/>)の協力を得て、インターネットからHP上の人材情報データベース登録画面にアクセスしていただき、UMINユーザーのIDとパスワードを使用して、ご自身の登録あるいは登録済み情報の修正などができる“オンライン人材情報データベース”システムの構築を進めております。登録画面には、当センターのHP(<http://www.ircme.u-tokyo.ac.jp>)よりアクセスができますので、ご利用、ご協力いただきますようよろしくお願い申し上げます。

ワークショップ「地域におけるプライマリ・ケア卒後・生涯教育プログラム」報告

センター客員研究員

松村 真司

2003年4月19日(土)・20日(日)の2日間、日本家庭医療学会主催の特別教育ワークショップ「地域におけるプライマリ・ケア卒後・生涯教育プログラム作成」が、当センター後援で開催されました。この企画は、英国ロンドン地区で、General Practitioner(GP)の卒後研修プログラムの管理運営に携わっておられるNeil Jackson教授(Dean of Postgraduate General Practice Education and Regional

Director of Postgraduate General Practice Education for the London Deanery)の来日を機に、英国のGP卒後教育システムを参考にしながら、今後日本で構築するプライマリ・ケア卒後・生涯教育プログラムの可能性を検討する目的で実施されました。Jackson教授はGPの卒後教育、生涯教育に関するトレーニング・プログラムの作成・実行、教育診療所や、指導医・研修医の管理・評価などを統括する立場にあり、さらに現在ウズベキスタンへの教育プログラム設立の援助や、フランスやスペインなどヨーロッパ諸国から



ニール・ジャクソン教授

のGPの招致にも従事されております。

当日は、英国の GP の卒業研修体制を Jackson 先生に概説していただきながら、本邦で用いることを前提に、診療所で研修医を指導する医師に必要な能力と、それを習得するための学習プログラム（指導医の研修プログラム）をワークショップ形式で検討・作成しました。当日は全国の臨床研修病院、大学、診療所から、都市部からも僻地からも、海外での研修修了者も勤務医も開業医も、研修中の若手からベテランまで、45名の多岐に渡る参加者が集まりました。そして、それぞれの立場の違いを踏まえつつも、それぞれが持つ教育資源や知識を集めて現実的にかつ質の高いプライマリ・ケア研修プログラムを作成しようと、一日半にわたって幅広い議論を展開しました。本邦の地域医療教育で緊急性・重要性の高い項目を選び、それぞれの項目について、プログラム・資源・評価方法にまでおおよそカリキュラムの立案を小グループに分かれて試みました。現在問題になっている Community-based education をどのように教育していくか、そしてそのためにどのように指導医を育てるかなど、今後のわが国の医学教育において大変価値ある議論がなされたと思います。今回のワークショップから得られた成果が今後の本邦における医学教育プログラムに役立つことを願っております。

プログラムの概要

[第1日目 4月19日(土)]

■講義：

日本のプライマリ・ケア卒業・生涯教育の現状

伴 信太郎（名古屋大総合診療部）

ロンドンの GP 教育の現状

Neil Jackson（London Deanery）

東ロンドンの GP Vocational Training

斉藤 康洋（国立病院東京医療センター）

■グループワーク (1)：

「診療所医師が GP 研修の指導医となるために学ぶべきこと」

■グループワーク (2)：

「指導医研修プログラムの目標・資源・組織」

■レセプション

[第2日目 4月20日(日)]

■講義：

英国 Dundee 大学における医学教育学修士コース

藤沼 康樹（北部東京家庭医療学センター）

■ロンドンの教育プログラムの事例

(1) London Deanery の事例

Neil Jackson

(2) MSc in Primary Care in Queen Mary Univ. of London

斉藤 康洋

■グループワーク (3)：

「指導医研修プログラムの教育方略の具体的内容」

■講義：

PCFM ネットでの教育評価の取り組みと課題

松村 真司（松村医院・東大）

London Deanery での教育評価について

Neil Jackson

■グループワーク (4)：

「指導医研修プログラムでの評価」

■全体討議・質疑応答



日本家庭医療学会 ニール・ジャクソン先生を囲んで

Faculty Development の報告と計画

センター助教授
（医学教育国際協力研究部門）
大滝 純司

Faculty Development (FD) とは、教育・研究・診療・管理運営などの諸機能の改善を目指して、関係者が組織的に考え学ぶ、様々な活動の総称です。当センターは、医学部教務委員会、医学教育改革委員会、教務掛、医学部附属病院総合研修センターなどの関係機関・組織と協力しながら、実践研究 (action research) として FD を行っています。

このコーナーでは、平成15年1月以降に当センターが主催して実施した FD について紹介するとともに、8月末に予定している、合宿形式の FD (医学教育ワークショップ) についてご案内いたします。

1. クリニカル・クラークシップ準備会 (指導医)

■目的：

(1) 現在のクリニカル・クラークシップにおける改善すべき点を同定し、改善方策に関する提言をまとめる。



グループ・ワーク (KJ 法)

(2) クリニカル・クラークシップに関する共通学習目標を担当各科の間で共有する。

■日時：

平成15年1月15日(水) 15:00-17:30



Noel 先生のミニレクチャー

■場 所：
東京大学医学部附属病院 入院棟15階
大会議室

■参加者：
臨床各科・部門の平成15年度クリニカル・クラークシップ担当者（約40名）

■講 師：
Gordon Noel 教授（オレゴン大学医学部）

- 内 容：
- (1) 14年度共通学習目標およびクリニカル・クラークシップ評価の提示
松村客員研究員
 - (2) グループ・ワーク
3グループに分かれて、下記のテーマについて検討
 - 本年度クラークシップにおける各科の経験（良かった点）
 - 次年度クラークシップにおける問題点（改善すべき点）
 - 共通学習目標について改善すべき点
 - (3) グループ発表
 - (4) Noel 先生のミニレクチャー

2. クリニカル・クラークシップで学生を指導するための研修会（研修医 FD）



ロールプレイ



Takayama 先生の講義

- 目 的：
- (1) クリニカル・クラークシップで学生を直接指導する研修医等が、クリニカル・クラークシップの目的や目標を知る。

- (2) クリニカル・クラークシップで学生を直接指導する研修医等が、臨床現場での指導のコツを身につける。

■日 時：
平成15年 3月19日（水）15：00-16：30
平成15年 3月20日（木）15：00-16：30
（同様の企画を2回実施）

■場 所：
東京大学医学部附属病院 入院棟15階
大会議室

■参加者：
臨床各科・部門の研修医を中心とする
クリニカル・クラークシップ指導担当
医（2日間で約70名）

■講 師：
John Takayama 助教授（カリフォルニア大学サンフランシスコ校/本年4月
から国立成育医療センター）

- 内 容：
- (1) クリニカル・クラークシップのカリキュラムの説明
目的と目標/期間/配属/させて良いこととさせてはいけないこと/
保険やワクチンの状況/実習に関する患者への説明と承諾
 - (2) 学生指導のワンポイントアドバイス
Takayama 先生の指導による、ロールプレイと講義

3. 臨床診断学実習指導医のための FD



会場の様子

- 目 的：
- 平成15年度臨床診断学実習における学習効果を向上させるために、指導担当者へ関連情報を提供するとともに、指導担当者間の意見交換を促進する。

■日 時：

第1部
平成15年 4月16日（水）13：00-15：00
第2部
平成15年 4月23日（木）13：00-16：00

■場 所：
東京大学医学部附属病院 入院棟15階
大会議室

■参加者：
臨床診断学実習担当教官（2日間で約40名）

■講 師：
教務委員会臨床診断学実習小委員会委員

- 内 容：
- 第1部
- (1) OSCE（客観的臨床能力試験）
 - (2) 教材や設備
身体診察ビデオ/標準的書籍（医療面接、身体診察、症候学、診断学）/
診察用具の購入予定/少人数学習室の管理
 - (3) 臨床技能実習室（skills lab.）整備計画
 - (4) 指導内容の説明と指導方法
共用試験の目標・評価項目/指導方法での留意点
 - (5) 実習スケジュール
 - (6) 質疑応答

第2部

- (1) 身体診察ビデオ貸與
全身状態・バイタルサイン・上肢/頭頸部/胸部/腹部・下肢/神経系
- (2) 各種模型・シミュレーターと書籍の展示

4. 第三回東京大学医学部医学教育ワークショップについて（第一報）

医学教育改革委員会と医学教育国際協力研究センターでは、下記の要領で、第三回東京大学医学部 医学教育ワークショップ（対象は東大医学部教官）を開催します。今後、タスク・フォース委員会を組織し具体的な企画を検討し、企画がまとまり次第、医学部ならびに医学部附属病院の教官をはじめとする御関係の皆様に参加の御案内を差し上げます。皆様の御理解と御協力を御願いたします。

■期 日：
2003年 8月30日（土）、31（日）

■会 場：
湘南国際村センター（神奈川県三浦郡葉山町）

5. 臨床技能実習室 (skills lab.) 整備中

医療関係の学生や研修者が、患者さんに直に接する前の段階で、必要な態度や技能を、模擬的な学習環境で安全かつ効果的に学ぶための学習施設が、臨床技能実習室 (Clinical Skills Learning Center 別名 skills lab) です。当センターは、医学部附属病院救急部や総合研修センターをはじめとする関係各方面と協力して、医学部附属病院に臨床技能実習室の整備を進めています。完成いたしますと、以下の教材や装置を利用した学習が可能になります。

ACLC シミュレータ (4台) / 除細動器 (1台) / 半自動除細動器 (1台) / 心電計 (1台) / 心音シミュレータ (1台) / 呼吸音シミュレータ (1台) / 電子聴診器 (10人分) / 乳房診察模型 (1台) / 縫合練習キット (10セット) / 局所麻酔キット (1セット) / 筋肉注射パッド (2枚) / 前立腺触診モデル (1台) / 眼底診察シミュレータ (5台) / 耳の診察シミュレータ (5台) / 採血・静注シミュレータ (5

台) / 携帯式検眼・耳鏡・鼻鏡セット (10セット) / 上腕部筋注・皮下注シミュレータ (3台) / 臀部筋注シミュレータ (3台) / 臨床教材作成・自己学習システム (1式) 他

準備が整い次第、関係の皆様にご利用のご案内をいたします。どうぞご期待ください。

6. センターセミナーとリサーチカンファレンス開始

当センターでは、医学教育国際協力に関する研究活動を促進する目的で、「センターセミナー」と「リサーチカンファレンス」を毎月一回開催することにいたしました。

「センターセミナー」は、

- (1) 医学教育関係者をゲストに招いての勉強会
- (2) 研究方法に関する勉強会 (統計、社会学、教育学、心理学など)

(3) 国際協力関係者をゲストに招いての勉強会

などを行う企画で、当面は毎月第4水曜日18:00~20:00に開催する予定です。

初回の5月28日には、「SGIM (アメリカの総合内科学会) での発表 (当センターの紹介) 及び学会の様子の報告」という内容で、当センターの大滝助教授が講師を担当しました。

「リサーチカンファレンス」は、研究に関する情報交換や予演会などを気軽に行うための集まりで、こちらは毎月第2水曜日10:00~11:30の開催を予定しています。5月9日に最初の会合を持ち、参加者の自己紹介やカンファレンスの今後の予定について話し合いました。

今後の日程や内容などについては下記にお問い合わせください。

■問い合わせ先:

医学教育国際協力研究センター 大滝 / 永久保 / 田口
電話: 03-5841-3583 FAX: 03-5802-1845

北里柴三郎先生 生誕150周年記念シンポジウム

— 教育者・研究者として —

センター長
加我 君孝

戦前の東京帝国大学医学部の卒業生の中で、歴史に残る輝かしい“業績”を残した医学者は少なくないが、とりわけ大きな星のように今後も輝き続けるのは北里柴三郎先生であろう。その業績の中でドイツのコッホ教授の研究室に留学中に開発した破傷風菌の純粋培養法と抗血清療法すなわち免疫療法が挙げられる。その後、上海、淡路島でのペスト菌の発見があるが、これはグラム陽性か陰性のどちらの記載であったか疑義があるという説がある。赤痢菌発見の志賀潔、サルバサンの秦佐八郎など伝染病研究所時代“細菌学研究”の黄金期に研究者の養成、北里研究所長、慶応大学医学部長時代の教育者としての時代など活躍は広範囲にわたる。

これまで東京大学本郷キャンパスで北里柴三郎の業績を記念する会は持たれることはなかったようである。東京大学の卒業生ではあるがその活躍の場は目黒の伝染病研究所や北里研究所であったからであろうか。しかし、3年前にノーベル医学生理学賞の利根川進先生を医学部標本室にご案内した折に、ここは北里柴三

郎関連の物はないのかと聞かれた。その弟子の志賀潔自筆の“昭和医箴”の額以外は何もないことを説明した。最近新しく完成した東大医科研のミュージアムには展示されている。是非本郷キャンパスで記念シンポジウムを実現したく企画し、シンポジストは北里研究所病院院長・土本寛二先生に“北里柴三郎と福沢諭吉”、元医科研教授の小高健先生に“北里柴三郎と伝染病研究所”、現医科研教授の高津聖志先生に“抗体療法とその将来展望”、センター教授の北村聖先生に“世界の切手でみる北里柴三郎と野口英世”、お孫さんに当たる明治製菓社長の北里一郎先生に“祖父・北里柴三郎”のテーマでお引き受け頂いた。小生は担当した企画の際に、ある先生からシンポジウムの基調は“英雄崇拜主義”と“客観的な歴史の記述”のどちらをとるのか質問があった。私は少年少女対象の伝記や小説家による主観的英雄主義的な立場よりも、淡々として歴史的事実に基づいた客観的、科学史的な解説をしていたらだき、“正しい北里柴三郎像”をこのシンポジウムでは作りたいと考えていたので後者の方針である旨お伝えした。その結果、生誕150周年にふさわしいシンポジウムとなったのが嬉しいことであった。



北里柴三郎先生 生誕150周年記念
シンポジウムのポスター

シンポジウムの内容は明治製菓株式会社の御好意で冊子として近く発行される予定である。なお、我々が作成したポスターは好評で学内の掲示板から盗難にあうほどであった。

ノエル先生医学教育連続講義の出版計画について

センター講師
(医学教育国際協力事業企画調整・情報部門)
水嶋 春朔

2001年10月から翌2003年3月の半年間、当センターの外国人客員教授としてオレゴン医科大学医学教育担当副部長ゴードン・L・ノエル教授が滞在し、医学教育の活動に積極的に参加されました。全6

回にわたる「医学教育連続講義」は、学内外から大変好評をいただき、第5回および最終回の様子は、MINCS（大学病院衛星医療情報ネットワーク）でも中継されました。

当センターではこのときの講義内容を翻訳して、出版する計画を進めています。出版された折には改めてご案内申し上げます。

本の内容は以下になる予定です。

- Lecture 1 : History of Medical Education
- Lecture 2 : Clinical Clerkship
- Lecture 3 : Medical Schools in the US
- Lecture 4 : Problem-Based Learning
- Lecture 5 : Evaluation of Clinical Skills
- Lecture 7 : General Education of Physicians
- Lecture 8 : Summing Up

赤津晴子先生講演会

センター事務補佐員
田口 淑子



講演会での赤津先生

6月10日(火)に当センター客員研究員であるピッツバーグ大学医学部の赤津晴子先生の講演会を開催しました。講演の前にセンター内でミーティングを行い、日米の医学教育事情などについて

情報交換がされました。講演会の前半は「アメリカの医学生やる気はどこからか？」と題してのピッツバーグ・ジャパンプログラム(日米臨

床医学交流プログラム)の説明、後半は「Endocrine Emergency」と題してのインタラクティブな教育講演になりました。講演の際には、学生・研修医から患者役と医師役のボランティアを募り、ロールプレイも行いました。

講演会には北米の医学教育に興味のある学生や教官が多く参加し、大変熱のこもったものとなり、講演会終了後には、簡単な懇親会を開催し、多くの学生達が赤津先生と歓談を楽しみました。

6月4日(水)には、ジョンズ・ホプキンス大学の医学生で、現在来日中のChristopher Hurtさんを囲んでの会合を開催し、学生の立場から見た米国の医学教育の利点や問題点などが報告されました。

また、6月26日(木)には、現在医学



赤津先生講演ロールプレイ

部生化学・分子生物講座細胞情報学教室に留学中のスウェーデンからの留学生Peter Rudbergさんを迎えて、スウェーデンの医学教育やMD/PhDコースについて話す会を開催する予定です。

当センターとしては、今後もこのように活発な情報発信の場を提供していくことは重要であると思われま

自己紹介

センター研究機関研究員
若林 正



2003年5月1日より当センターの研究機関研究員として着任いたしました若林正と申します。平成元年に東京大学理科二類に入学し、進学振り分けで教育学部学校教育学科に進

学した後、そのまま大学院教育学研究科に進学し、長い学生生活を送ってまいりました。

学部や大学院修士課程ではHuman Computer Interfaceに関心をもち、認知心理学の立場から、パソコンや家電製品のマニュアルの「わかりやすさ」に関す

る比較検討や、コンピュータを活用する授業の参与観察などを行ってまいりました。その後、日米で二度の肝移植を経験するなかで、国際移植者組織トリオ・ジャパンの運営に関わるようになったことや、「ケア」という概念に関心をもち、博士課程進学後は、次第に臨床心理学へと関心を移し、わずかながらも実務経験を経て、臨床心理士資格を取得するに至りました。また、日本における移植医療の普及・啓発に関わるなかで、日本の救急医療の現状や課題に接する機会を得て、心肺蘇生法のガイドラインの翻訳、『突然の死—そのとき医療スタッフは』(医歯薬出版)の翻訳などを行ってまいりました。

センターでは、これまでの経験や、心理学や教育学の知見を活かして、医療のユーザーである患者・家族の思いや経験を、医学教育、そして広くは医療に還元していくことのできるような研究活動を行っていきたくと考えております。

さて、話が前後しますが、私は修士課

程在学中の1996年1月、東大病院の第1例目として、幕内雅敏教授の執刀で母親からの生体肝移植を受けました。その後、原疾患である原発性硬化性胆管炎の再発とも慢性拒絶ともいわれ、原因ははっきりしませんが、再移植が必要な状態となり、修士論文を提出して博士課程に進学した1998年4月、多くの方々の支援を得て渡航し、同年6月、マイアミ大学にて脳死肝移植を受けました。

おかげさまで再移植からちょうど5年が過ぎようとしております今日、そして卒後研修必修化や共用試験の開始を目前にして、医学教育の制度が大きく変わろうとしている現在、私がこのようなセンターに採用されましたのも何かのご縁かと存じます。このようなセンターの研究員としては異色の経歴を持つ私ですが、皆様のご期待にお応えできますよう、尽力したいと思います。今後ともご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い致します。



センタースタッフ、左より 大滝、永久保、北村、田口、加我センター長、三浦、水嶋、酒井、松村、渡辺

センター日誌：2003年1月—2003年6月

- 1月 15日 クリニカル・クラークシップ準備会
- 2月 21日 客員研究員ミーティング
第2回医学教育国際協力研究フォーラム「大学における医学教育国際協力活動の推進」
- 3月 13日 北里柴三郎生誕150周年記念シンポジウム
—教育者・研究者としての北里柴三郎先生—
19日～20日 研修医のための学生指導研修会
- 4月 10日 アフガニスタン医学教育支援会議（JICA 医療協力部、文科省国際協力政策室、当センター教官北村・大滝・水嶋、於 国際協力事業団（JICA）
16日、23日 臨床診断学実習のための Faculty Development
19日～20日 日本家庭医療学会主催特別教育ワークショップ
「地域におけるプライマリ・ケア 卒後・生涯教育プログラム作成」
28日 アフガニスタン復興支援事業報告会（於 文部科学省）
- 5月 7日 平成15年度 第1回 センター運営委員会
- 6月 4日 ジョンス・ホプキンス大学 医学生 Chris Hurt さんとの懇談会
10日 ピッツバーグ大学医学部 赤津晴子先生講演会
—北米型臨床講義「内分泌救急」とピッツバーグ・ジャパンプログラムの紹介—
20日 オレゴン大学医学部附属病院救急科 Mohamud Daya 先生講演会
—病院前救急医療：アメリカにおける公衆自動除細動器の実際と有効性および中毒学：新しい拮抗薬と拮抗薬全般—
26日 スウェーデンからの留学生 Peter Rudberg さんとの懇談会

編集後記

4月1日からセンターの事務補佐員として勤務を開始しました。ちょうど満開の桜が医学図書館2階にあるセンターの窓全面を薄桃色に埋め尽くし、センターを華やかに盛り立ててくれるようでした。それから2ヶ月、梅雨を迎えた今、本号の表紙にもなっているあじさいの花が日々色を変えていきます。ニュースレターの編集に取り組み始めたのは5月初旬のことでした。初めは手探りだったのが、周囲の人々の助言と協力を得て徐々に歩みを進め、おかげさまで第6号として無事発行するに至りました。ご協力下さった方々、どうもありがとうございました。(み)

発行 2003年6月24日
 発行人 加我君孝
 発行所 東京大学医学教育国際協力研究センター
 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
 TEL 03-5841-3583
 FAX 03-5802-1845
 印刷所 株式会社 学術社